



新時代の若手キャリアをつくる —産婦人科教育の最前線—

いつの時代も「教育」は次世代へ知識や技術をつないでいき、医学を発展させるために大切な役割を果たしてきました。見て学ぶ、聞いて学ぶ、調べて学ぶ、やってみて学ぶ—これらの教育における基本的要素の価値は変わらないものの、その手法やプロセスは近年大きく変化してきました。

手術を例にあげれば、開腹、腔式から腹腔鏡、子宮鏡、そしてロボット手術へと急速に技術革新が進んだこの20年。技術革新をきっかけに、その教育システムも大きく変わってきました。手術に直接参加しなければ得られなかった経験や知識は、記録媒体の進化によって簡単に共有されるようになり、まさに技術の「見える化」が実現されました。また世界的パンデミックによるコミュニケーション手法の変化に伴い、こうしたリアルな経験や知識はオンライン上で誰でも等しく手に入れられるものとなりました。目の前の手術書だけに頼っていた時代が、身近な先輩の教えがすべてだった時代がこの5年ほどで一気に変わり、情報も教育も民主化されつつあります。

さて、技術革新、情報共有革新が進むなか、果たして産婦人科学は発展していくでしょうか。本当に情報の民主化によって産婦人科教育の格差は改善しているのでしょうか。また、時代は医師の働き方改革や個人の価値観の変容をもたらし、医師のキャリアもダイバーシティが拡大しています。そのなかでも産婦人科全体としても個人としても成長や発展への歩みを止めるわけにはいきませんし、社会からは新時代のスピードに見合う成長が期待されています。

産婦人科領域においては女性の健康に対する社会ニーズが高まる一方、分娩数減少という大きな波も押し寄せています。こうしたなかで今後も先人たちが築き上げてきた産婦人科学を後進へつないでいきながら、さらなる発展へ向かうための処方箋を各分野の専門家、オピニオンリーダーからいただき、新時代における産婦人科教育の道標をここにまとめていきたいと存じます。

(神奈川県立がんセンター婦人科 鈴木幸雄)

(横浜市立大学医学部産婦人科学教室 宮城悦子)